

今こそ 家庭科の重要性を訴える

日本家庭科教育学会第48回大会決議

2005年6月25日

今、第48回の大会を迎える日本家庭科教育学会は、わが国の家庭生活の充実向上と家庭科教育の発展を目指して、家庭科教育の研究及び実践に取り組んできました。今後、家庭科教育に対して、教育関係者および保護者、市民の皆様のご理解をいただき、さらに一層子ども達の学びが充実するようご協力をお願いいたします。

1. 日本家庭科教育学会は、2002年度に、小・中・高校生の家庭生活に関する認識と実態の全国調査を行いました(調査対象 11,142名)。「家庭のはたらき」の意識については、小学校、中学校、高等学校の全ての学校段階で、「家族みんなが楽しくすごすこと」が20年前の調査結果と同様に第一位で、家族を大切に思う気持ちは高い割合を占めていることがわかりました。さらに、児童・生徒は、家族のために、性別にこだわらず家事をすることをごく自然なことと考えていることもわかりました。このように、家庭科は、子ども達に生きる力を育てることに大いに寄与しています。(『児童・生徒の家庭生活の意義・実態と家庭科カリキュラムの構築—家庭生活についての全国調査の結果』日本家庭科教育学会(2002))

2. 男女がともに学ぶ家庭科は、現行学習指導要領で男女共同参画社会を推進する教科としての位置づけがなされています。そこでは、家庭の仕事と他の活動が両立できるよう、男女はともに家族の構成員であり、お互いに協力し、社会の支援も受け、家族としての役割を果たしながら、仕事をしたり、地域活動ができるようにするための学習の充実が述べられています。このことは、個人の尊重と両性の平等に基づく家族・家庭生活を創造していくことが、児童・生徒にとっても課題であることを意味しています。大人達が家族や家庭生活の歴史や文化を伝えながら、若い世代が主体的にこの課題に取り組めるよう、協力してくださることを希望します。

3. しかし、現実の児童・生徒達の家族・家庭生活の姿は、実にさまざまで、多様化した家族・家庭生活の縮図がクラスの中にあります。児童・生徒達が家族・家庭生活の創造の課題に取り組むには、自分の家族をかけがえのないものとして理解するとともに、現実の家族がどのようになっているかの事実を見つめ、これからの家族・家庭生活を考えられるような手順が求められます。そのために、家庭科の教科書の家族・家庭生活に関する箇所は、家族・保育・労働・経済等に関する諸分野の研究者や、児童・生徒達の実態をよく知っている教育現場の家庭科教師達の英知を集めて記述されていると本学会は理解しています。